

水辺の 生物



マツカサガイ

(イシガイ目イシガイ科)

写真提供および校閲：神奈川県水産技術センター内水面試験場

世界中に広く分布する淡水産の二枚貝・イシガイ科に属する貝で、日本では東北から四国、九州にかけての各地に分布している。小川や水路、池沼などの砂や砂礫底の流れのある場所を好んですみ、珪藻などの植物プランクトンをえさにする。殻の長さは40～60mmの中型卵円形で、殻頂（蝶つがいの部分）が前方寄りにあり後方が長く広がっている。殻頂はあまりふくらまず、殻幅は殻の長さの約35～40%程度とやや細長い。産地による変異が大きく、かなり細長いものを産出する地域もある。マツカサガイの名の由来は、殻の表面にさざなみのような連続する凹凸模様があつて、松かさ（松ぼっくりともいう）に似て見えることから。この模様は幼貝ほど顕著で、老成個体ほど目立たなくなる。

マツカサガイは淡水魚の一種であるタナゴ類の産卵母貝となる一方で、自らの子育ては魚類に依存して行われており、魚とはユニークな関係にある。タナゴ類はマツカサガイの出水孔から産卵管を差し入れて貝のえらの中に産卵。ふ化した仔魚は卵黄が吸収されるまで貝殻に守られて育ち、やがて自力で餌がとれるようになる頃に出水孔から貝の外に泳ぎ出る。タナゴ類は例外なくイシガイ類などの生きた二枚貝の体内に産卵するが、タナゴの種によって産卵に用いる貝の種類が異なり、マツカサガイに産卵するのは、ミヤコタナゴ、ヤリタナゴ、ゼニタナゴなどである。

一方、マツカサガイのメスは、オスが水中に放出した精子（精子球）を入水孔から取り入れ、えらの中に送り込んだ卵と受精させ、卵がグロキディウムと呼ばれる幼生になるまでえらの中で保育する。母貝の出水孔から放出されたグロキディウムは、ヨシノボリ類やドジョウなどの小魚のえらやひれ、口内に付着し、魚の組織内に潜り込んでしばらく寄生生活を送る。寄生している間にえらや内臓、足などが形成され、底生生活ができる器官が備わると魚体から脱落して自力で生活するようになる。

生息地である河川等の改修や水質の悪化、また、グロキディウムの宿主となる小魚がブラックバス等の食害で激減したことなどにより、各地で減少しているという。環境省レッドデータブック（RDB）の準絶滅危惧種であるほか、多くの都道府県でもRDB記載種とされ、絶滅が心配されている。

参考文献：

『日本産淡水貝類図鑑 1 琵琶湖・淀川産の淡水貝類』ピーシーズ、2003年刊

『日本産淡水貝類図鑑 2 汽水域を含む全国の淡水貝類』ピーシーズ、2004年刊